



名を引き受けたあと

名を引き受けると、
存在と役割のあいだに余白が残る。

人はやがて、名づけを拒まなくなる。

役割も、評価も、肩書きも、
一度は外側から与えられたものを、
自分の輪郭として抱えはじめる。

名を引き受けることは、屈服ではない。

妥協でも、諦めでもない。
自分を裏切る行為でもない。

ただ、
存在が世界と接続する形式を選び直すだけである。

名づけの前、
存在は未完のまま震えていた。

名を与えられた瞬間、
その震えは一度、固定される。

だが本当の変化は、
拒むかどうかではなく、
それをどう置き直すかにある。

名を内側に取り込むとき、
それに飲み込まれることもできる。

あるいは、
名をひとつの「器」として扱うこともできる。

前者は、
存在を役割に溶かす。

後者は、
役割を存在の上に静かに置く。

名を引き受けるとは、
それに一致することではない。

名と存在のあいだに、
わずかな余白を保ったまま立つこと。

それができたとき、
名は拘束ではなくなる。

緊張も、役割も、
存在の上に置かれた形式へと戻る。

名は、
あなたのすべてではない。

だが、
あなたが立つ場所の輪郭にはなる。

Edition — 存在の芯
別景：名を引き受けたあと

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026